

1957 昭和32年
全国大会

宮谷法合宗務総長が「宗門白書」を発表された翌年、1957年8月24日から26日までの3日間、北海道教区で仏教青年連盟とボーイスカウトの全国大会が開催された。教区にとっては、現如上人33回忌に続く大きな集いとなったが、今回は全国に呼びかけての大会である。会場は、札幌別院・支笏湖畔をはじめ、札幌大谷高校でのパ



9月には「真宗同朋会条例」が公布された。ここから同朋会運動が始まるのです。

その原点を尋ねる時、1956(昭和31)年の宮谷法合宗務総長の「宗門白書」から始まるという見方もあり、さかのぼって1951(昭和26)年、札幌別院宗務総長による第一声「宗門各位に告ぐ」からとする見方もあり、さらにさかのぼり1948(昭和23)年、蓮如上人450回御遠忌法

北海道50年の歩み—真宗同朋会運動—

1957年、市内をパレードするなど、広範囲にわたって展開された。全国大会の開催決定が報じられたのは、大会3カ月前の5月。そこから開催要項が作り上げられていくと同時に、教区会臨時会にて予算措置を講じ、スタッフについても教区を挙げた体制が整えられていった。

「北海真宗」9月号には、この大会の模様を「集う若人七百有余 感激あふるゝ法悦の大結集」との見出しが打たれている。大会は、総裁に門首を迎え、大会長には訓

要を翌年にひかえた1月に鎌倉雄宗務総長時代の5部長、訓彌信雄、竹内良恵、竹田淳照(北海道教区第8組朋心寺・後に札幌大谷学園学長)、岸融証、藤原正遠の5人を中心として結成された「真人社」を始まりとする見方もできると思われます。「真人社」という名の由来は「真宗仏教」であり「正法真宗」であるところの「真宗人」を生み出し全人類の課題にこたえるというところで初めは「真宗人」という名称であったが、曾我量深師の「真宗でいいけれども、ややもすると一宗派にとらわれる危うさがある。一宗派の運動ではないんだから、真人にしなさい。真人が生まれるのです。」ということから「真人社」となったものです。

嗣信雄宗務総長が就いている。大会に寄せられたメッセージは、本願寺派宗務総長をはじめ、ハワイ・パークレー・ブラジルの各開教区。仏青大会としては、原爆10年を期して長崎に結集した大会に続くものであるが、スカウトとしては、戦後初の全国大会。また、社会について、御遠忌についても踏み込んだ討議が重ねられ、仏青・スカウトともに宣言や決議を採択して閉会を迎えている。

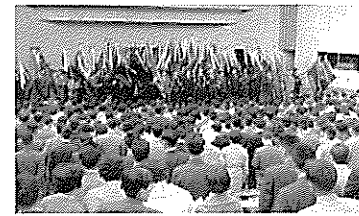
全国から北海道に700名を超える人々が結集しての大会。そして、そこで真剣な討議を重ねられ

「真人」に象徴される真人社運動は、もともと純粹な信仰運動、教学運動として、広く人類の立場から真宗仏教の意味をとらえて、人類に捧げる教団の形成をねがった運動でありました。一人一人が、真の仏弟子として我が身の在り方を教法に問い直し、無条件の連携を現成していこうとする信仰運動だったのです。と護嵩氏は「訓彌信雄論集」の中で述べている。

やがて同朋会運動となる背景にあったこの運動が既に、それまでの教団の枠を超えた「純粹な信仰運動」を名乗るものであり、親鸞聖人が開顕せられた「真実信心」はどこまでも「個の自覚」に立ったものであるべきことを願っているものであった。

たことは何をもたらしたのか。この大会に参加した金沢教区のご門徒は、「今、開法会に身を運んでいるのはあの時に触れた人たちの姿が今も残っているから」と語られた。

御遠忌に向けて歩みだした人々の姿が、自身を聞かへと駆り立てる原動力となつて、今も心に刻まれている。



後期教習 8名
有縁の方に促され、改心に日頃の生活を考えさせられました。

11/15/17 第5組

一般奉仕団 6名
良い教導先生に恵まれ、わかりやすくお話しいただきました。

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」
教区教化テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

教化本部通信 【第40回】

真宗門徒の生活 朝夕のおつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょう
を回復しよう すずんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 興り(一)

真宗同朋会運動は、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌の翌年に発足50年となる。真宗同朋会運動50年に向けた取り組みとして、真宗同朋会運動の「興り」「歩み」「展望と方向性」について検証し連載する。

真宗同朋会運動は、2011年にお迎えする宗祖親鸞聖人750回御遠忌の翌年に発足50年を迎えます。

「真宗同朋会」とは、純粹なる信仰運動である。

それは従来単に門徒と称していただけたものが、心から親鸞聖人の教えによって信仰にめざめ、代々檀家と言っていただけのもので、全生活をあげて本願念仏の正信に立っていただけた運動である。

その時寺がほんとうの寺となり、寺の繁昌、一宗の繁昌となる。然し単に一寺、一宗の繁昌のためのものでは決してない。

それは「人類に捧げる教団」である。世界中の人間の真の幸福を開かんとする運動である。

「真宗」1962年12月号の巻頭文

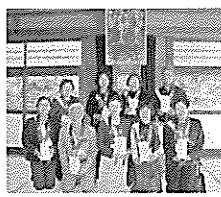
この言葉に運動全体の方向が示されていると思えます。それは宗門の辿ってきた歴史を経て、そして今ある念仏の回復運動であり、同時に現実的人間社会に呼応するものではないでしょうか。

しかし、この運動を顧みるとき「大谷派なる宗教的精神」(水島見一著)の「発行にあたって」のなかにある「このことは、運動40年を節目として開催されました」「2001年度中央同朋会議」において「私たちは真宗同朋会運動をわかつたものにしていなかっただか」という課題が提起されなければならなかったことでも明らかのように、これまでの私たちの歩みは、運動の趣旨を自明のこととしてきた40年であったと言えるのではないのでしょうか。このような現実に立ち、私たちは、今あらためて「真宗同朋会運動とは何か」という問いを起し、運動の歴史と意義を共に確かめるべき時にあると思うのであります。」という熊谷宗恵前宗務総長の指摘を真摯に受け止め、北海道教区として真宗同朋会運動の検証を行っていきたくと思えます。

この運動は1961(昭和36)年4月宮谷法合宗務総長のもと宗祖親鸞聖人700回御遠忌法要が執行された。その翌年、訓彌信雄師が宗務総長となり、6月「同朋会」の形成促進、又同朋会運動第一次5ヶ年計画が発表され、同年

宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌 お待ち受け総上山

▼奉仕団 11月▲
11/4/5
函館別院お待ち受け 19名



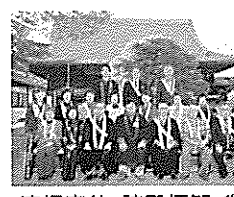
おみがき奉仕をさせていただきました。初めての経験のご門徒も多く、感銘を受けられていました。

11/11/12 第6組 法榮寺・第14組 大安寺
16名



奉仕団として本山で過ごせた意味は大きい。また上山したい。(桂 励)

11/12/13 第4組 極楽寺 16名



清掃奉仕・諸殿拝観・御修復現場視察と盛大くさんの日程でした。